

〈資料紹介〉

関西大学図書館蔵『詞八衢』版本の書き入れについて

——富樫広蔭の『詞八衢』継承の一過程——

鍵 本 有 理

はじめに

国語学史上重要な位置を占める、本居春庭の「詞八衢」は、文化五（一八〇八）年に刊行された。この春庭の学説により、日本語の活用の体系が確立され、現代まで受け継がれている。また当時の学者達の間にも大きな反響を呼び、所謂「八衢学派」を形成した。

その春庭の門人、富樫広蔭ははじめ本居大平に入門し、その養子となるが、後に春庭に就いて学び、「詞通路」の校正などにも携わった。著作は多く散佚したが、現存する「詞玉橋」「辞玉櫛」は本居宣長・春庭以後の文法研究の体系化がなされたものとして知られている。その成立については既に「詞玉橋」の複数の草稿本の発見

などにより、いくつかの研究がなされているが、それ以前には、春庭の語学の普及者として「詞八衢」を各地で講義してまわり、春庭をして「八衢醜男」と言わしめたことが知られている。

特に文政九（一八二六）年頃には淡路島において講説が行われ、その際使われたと見られる「詞八衢捷徑」なる本が近年紹介されている。なお後に刊行された鈴木重胤の「詞のちかみち」（弘化二（一八四五）年刊）は、この折に門人となった山口敏樹の「詞八衢捷徑」の書写本をそのまま出版したものとして、広蔭の門人から非難されている。

いずれにせよ文政九年十一月には「詞玉橋」の草稿が成っており、文政九年という年は、広蔭が当時難解とされた「詞八衢」を十分に

理解し、後の自説の発展の基礎を築いた時期として注目すべきであろう。

ここに紹介する「詞八衢」の版本は、文化五年の初版本であるが、初版本の中でも二七・五センチ×一九・二センチの大本に該当する。「南泉岸和田後曼荼羅院陳阿蔵書記」の印があり、下巻本居大平の跋文の後の「耳」の部分に「文政九丙戌年三月一日校合於廣蔭主本畢 陳阿」と記されている。

陳阿は本居全集（吉川弘文館）首巻所収の本居大平の「教子名簿」に「岸和田 光明寺 陳阿」と名が見える。都頭見堂調音美と号し、著作としては「国書総目録」によると「当麻曼陀羅搜玄疏探摘聰書」（立禪述・陳阿記）、また「岸和田市史」第七巻（昭和五十四年三月、岸和田市史編さん委員会）によると自筆稿本「竹杖の日記」がある。その陳阿が広蔭の本を見て校合した旨である。

書き入れの多くは全般にわたって用例の補充と出典などを記したものであり、後述するように後に加えられたと思われるものもある。それらについても「詞八衢」がどのように読まれていたか、参考にするべき点はあるが、この件はまた別の機会に譲ることにする。ここでは広蔭の学問の発展を見る上で注目すべき一、三の箇所を取り上げ、概要を記すにとどめる。

四種の活の図

まず取り上げたいのは活用の体系を記した、春庭の学問の基本とも言うべき「四種の活の図」（上 四ウ、五オ）である。「詞八衢」のこの図についてはよく知られているが、書き入れの部分を（ ）で示した形で次に挙げる（図一）。なお各活用形は版本・書き入れ共に全て○で囲ってあるが、印刷の都合上○のない形で記す。

一見して書き入れのある方が現代の文法書の活用表に近く、活用の理解がしやすいように思われる。春庭は、図の欄外にもあるように「切る、と續くとを兼」ねるような「一つなる」場合には同形の活用形を重ねて載せることがなかったが、既に広蔭の講義時点においてはこのような活用表で理解がなされていたのであろう。

また、当時の「俗語」としての活用形、つまり現在いう上二段・下二段の一段化した形、また四段活用の動詞の未然形に「う」のついた「五段活用」の形の書き入れがあるほか、「受るてにをは」についても補入がある。

そして春庭の研究では、各活用形に名称を与えるところまでは及ばず、今日我々が使用している「未然・連用・…」の名称は、東条義門の「友鏡」（文政六（一八二三）年刊）などに挙げられた「将然言・連用言・截断言・連体言・已然言」（別に使令が小さく設

〈図1〉

○四種の活の図 并 受るてにをは

(未分俗體)

(体言ニモナル 用言ヘツク)

此所四段の活と一段の活とは切ると續くとを兼て一ツなるを中二段の活
下二段の活にては二ツにわかれたり

(体言ヘ)

段 二 中				活 の 段 一						活 の 段 四					
試	恋	落	起	居	見	干	似	着	射	釣	住	逢	打	押	飽
み	ひ	ち	き	ゐ	み	ひ	に	き	い	ら	ま	は	た	さ	か
										(ロ)	(モ)	(ホ)	(ト)	(ソ)	(コ)
ぬ	じ	ず	ほめ	ね	まん	ぬ	じ	ず		ね	まん	ぬ	じ	ず	ほめ
				(なん)	まし					(なん)	まし				
(み)	(ひ)	(ち)	(き)	(ゐ)	(み)	(ひ)	(に)	(き)	(い)	り	み	ひ	ち	し	き
けん	けり	て		(たり)	し	つる	けり	て		(たり)	し	つる	けり	て	
なば	き	つ、			しか	ぬる	なば	つ、		(ね)	しか	ぬる	なば	つ、	
										(なん)					
む	ふ	つ	く	ゐる	みる	ひる	にる	きる	いる	る	む	ふ	つ	す	く
らし	べきん	めり		(まかし)	とも	とらし	べきん	めり		(まかし)	とも	とらん	べきし	めり	(キル、方)
むる	ふる	つる	くる	(ゐる)	(みる)	(ひる)	(にる)	(きる)	(いる)	(る)	(む)	(ふ)	(つ)	(す)	(く)
(ミル)	(ヒル)	(チル)	(キル)												
にまで	かな	(ぞ)	(が)	(も)	(は)	より	を	にまで	かな	(も)	(は)	より	に	まで	かな
															(ツ、ク方)
むれ	ふれ	つれ	くれ	ゐれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	いれ	れ	め	へ	て	せ	け
ど	ば					ども	とば			(れ)	(り)	ども	とば		

(一段ナリ)

下の二段の活										の活		
飢	枯	消	譽	弁	兼	捨	瘦	受	得	率	旧	老
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	ゐ	り	い
	(ね)	(なば なん)	まし	んぬ	じ	です	(めしめ)			(ね)	(なまし なん)	
(ゑ)	(れ)	(え)	(め)	(へ)	(ね)	(て)	(せ)	(け)	(え)	(ゐ)	(り)	(い)
				し	つけん	けり	て				し	つる
				しか	ぬるば	き	つ、				しか	ぬる
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	う	る	ゆ
			(かし まじ)	とも	とらし	べき	らんり			(まじ)	(かし とも)	と
うる	る、	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる	うる	うる	る、	ゆる
(エル)	(レル)	(エル)	(メル)	(ヘル)	(ネル)	(テル)	(セル)	(ケル)	(エル)	(キル)	(リル)	(イル)
			(もは)	より	を	にまで	かな	(ぞ)	(が)	(もは)	より	を
うれ	るれ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ	うれ	うれ	るれ	ゆれ
				ども	とば							ども

(用言ヘツマク
体言ニモナル)
受るてにをは
此所一段の活中二段の活下二段の活は一ツなるを
四段の活にては二ツにわかれたり

受るてにをは
切る、ことは
(はも徒の結)

(体言ヘ)
続くことは
(そのや何の結)

受るてにをは
(俗語)

受るてにをは
こそその結辭

けられている」が受け継がれたものであるが、この書入本にはその義門の用いた名称と、広蔭が「詞玉橋」の草稿本、また「詞八衢捷徑」で用いた名称と説明が記されている。すなわち「四種の活の図」の左、「受るてにをは・・・」などの部分にかぶせて、各活用形に対応するように貼紙が付されている（図2）。

〈図2〉

「詞玉橋」の文政十二年以降の所謂改稿本、また「辞玉樺」においては「未然段・続詞段・断止段・続言段・已然段」の名称が使われるようになるから、この書き入れが文政九年のものであることと矛盾しない。また現存する「詞玉橋」の写本のうち、草稿本の最も古い姿をとどめているとされる板垣本には奥書がなく、京大草稿本には一之巻に「文政九年十一月十日稿同十一年六月廿日改写」の記事があるが、文政九年三月以前に

一名已然言 こそノムスピトナル スデニシカルライフコトバ 既然言	一名連体言 ぞのや何ノムスピトナル ハタラカヌコトバヘツマクコトバ 續體言	一名裁断言 徒ノムスピトナル クレテスワルコトバ 切居言	一名連用言 イヒスウレバハタラカヌコト バトナル ハタラクコトバヘツマクコトバ 續用言	一名将然言 ウクルテナヲハニヨリテ ネガフコ、ロトナル イマダシカラザルライフコトバ 未然言
-------------------------------------------	------------------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------

これらの名称が使われていたことになる。

なお「切居言」の「徒ノムスピ」の部分「詞八衢捷徑」には「(も)(に)(を)(は)ノ結ヒトナル」となっている。

広蔭のこれら活用形の名称は、義門の説を参考にしたことは推測がつくが、他に広蔭が義門の説を参考にしたと思われる書き入れもある。それらを次に掲げる。

義門の説による書き入れ

義門の「山口葉」は天保七（一八三六）年に刊行されたが、その十八年ほど前、文政元（一八一八）年には、既に初稿が成立しており、天保四（一八三三）年に精撰本が出来上がったとされる。初稿本と刊本との間には、増補、削除がなされており、安藤正次は「而して、此の増補した箇条や、削除した箇条は、取りも直さず、文政元年から天保四年に至る十六年間の義門の語学の進歩した痕跡を示すものであるが、この間に、義門は、春庭門の語学者と相往来して議論を上下し、為に得た所が少なくなかつたらしい。」とし、春庭門下の足代弘訓らと義門との間の交流について述べられた。^{註5}この書入本にも義門の説の影響とおぼしきものが見られる。

○しなめる（下 三十五オ）の語について、

義云此詞タ、ナユト云モ同言トキコユレバサ行四段ニナヤストモ活ケリ字鏡鍛奈也須 蜻蛉キナヤシタルナドアリ ナユハ竹取ニ手モ力モナエカ、リタル落久保ニオノカキタルアヤノハリ綿ノナエタルヲ又白キヌノナエタルナドアリ也行也サテ波行四段シナフヲ八衢ニシナエト同意トキコユレド行モ活モコトナレハ異ナル意アルニヤ、トイヘトヨク考レバ意同シカラザルベシシナフハ艶字ナドニアタリテシナヤカト云語ニ近クキコユナレドモナユシナユニハサキコユルハタエテナシ又古今序ニシボメル花ノヲ真字序ニ葵花トカケリ此シホムモシナユト近クキコユ猶考可シ

との書き入れがある。冒頭に言う「義」は義門を指すのであろう。次に「山口栞」初稿本の該当箇所を挙げる。

八ちまたにしなゆると出せる詞こは発語にしといはすた、なゆといへるも同語と聞ゆるをこれは佐行四段になやす字鏡に鍛の注に奈也須と見えたり蜻蛉日記にきなやしたるしかくとはたらける語もあるに考へまた念之葵。而万葉二巻とかける夏艸のとたとへておもひ之奈要て同巻といへる又竹取ものかたりに手も力もなえか、りたる落くほ物語におのかきたるあやのはりわたのなえたるを又しろききぬのなえたるなどいへるを見又俗言のなえるといふを思合するにもとより也行の活なることもまたことばの

意

くた もよく聞えたりさて波行四段活なるしなふといふ詞此しなゆとこよひて聞ゆるやうなれとよく考ればこゝろおなしからざるかしなふは、艶字などに当りてしなやかといふ語にちかくかよへるさまとおほしきあれとなゆしなゆといふ也行下二段の詞はさ聞ゆるたえてなし又しなゆはかのしほむといふにもちかく聞ゆといはんもわるからしか古今序にしほめる花の云々さて同真名序に葵花とかけりさてしなゆといふにも此字をかける例上に出せる万葉集の歌の如しかくゝに考ふるにしなゆとしなふとは別ならんとおもへと猶考ふへし

義門の説そのままの引用ではないが、参照したことが明らかである。また、後の刊本『山口栞』には「古今序・・・」などの部分がないことから、初稿本を見ていたことがわかる。

このほか、

○いくる(上 二十四ウ)について、

いけりいけにへなどいへば下二段なるべし四段の方ハ自然ルカタ下二段の方ハ他ヲ然スル方也

○たまふ(下 八オ)について、

賜四段ノ方ハウヤマフヘキ人ニツケ云詞下二段ノ方ハウヤマフヘキ人ニムカヒテコナタノ事ニツケテ云詞

○なぶる（下 二十二オ、ウ）について、

此詞波行ニテモ麻行ニテモ中二段ト下二段ト二方ニ活詞トミユ
中二段ハ古今ス、キオシナミフレル白雪万七將比オシム疑ナト是レ也
下二段ハ万七ス、キオシナベフル雪ニ云々後撰ニウエナメツ、
ゾワレハミルウツボ菊宴ウエナブル人ソシルベキナドコレ也中
二段ハ自ラ然ル方下二段ハワザトシカスル方トキコユ蜻蛉ナル
ハ中二段ノ方ナルベシ

なども、出典は記されていないが、それぞれ『山口采』初稿本の、
「いくる　いく」「たまふ　たまふる」「なぶ　なむ」の項と極めて
類似しており、広藤が自身の本に要約して記していたものであろう。
他にもこのような例はあり、また例えば（上 九ウ）の蜻蛉日記
からの引用「はちすには」の「は」の右に「も」とあり、「はちす
にも」と訂正、（上 十一オ）の後撰集（二五九番歌）からの引用
「時鳥はねならはしに枝つたひせよ」を「枝うつりせよ」と訂正の
書き入れがあり、これは義門が春庭に送った『詞八衢疑問』にも指
摘があるなどの問題がある。後考を期したい。

その他注意すべき書き入れ

——『詞通路』との関連などから——

春庭の『詞通路』は文化十一（一八一四）年に起稿されたかとい
われ、文政十一（一八二八）年二月に成ったが、広藤の校訂をへて
刊行されている。その中に挙げられた動詞には『詞八衢』での扱い
を修正したものがあつて、それらを中心に二、三の書き入れを紹介す
る。

○試みる

最初に挙げた「四種の活の図」に春庭が掲げた動詞のうち、「試
みる」は「み　む　むる　むれ」とあり、「麻行之図」（下 二十四
オ）にも「試コトメ」とあつて、中二段の活に分類されている。「試みる」
はいうまでもなく上二段活用であるが、「試む」の上二段の形が、
院政期頃から見え始め、問題となる語である。後に春庭もこれに気
づき、『詞通路』では「こころみる」を用いているが、広藤の『詞
八衢捷徑』にも「試む」は省かれ、代わりにマ行の中二段の動詞と
して「浴む」が挙げられている。

この書人本には「四種の活の図」「麻行之図」に「一段ナリ」と
いう訂正書き入れがあり、また「一段の活詞」（下 二十九オ）の
「みる」の下に「こころみる」を加え、上欄に、

陳云　紫日記にいか、いふべきなどくち／＼おもひこ、ろみる
中二段ニ出セルハイカゞ

と筆者である陳阿の意見がある。なおこの紫式部日記の用例は、

寛弘五年九月十五日の条にあり、「いかがいふべきなど」が正しいようである（池田亀鑑『紫式部日記』、昭和三十六年十一月、至文堂、など）。これらの書き入りが『詞通路』以前のものであるならば、興味深い。

なお後の陳阿の書き入れと見られる次の一文がある（下 二十九ウ）。

陳阿云活語雜話廿七丁云サルハクサクサノカナブンドモニモマ
タ漢文ヨミノ訓説ナドニモこゝろむトイヘルコトヤ、フルクヨ
リモミエタルハタ少カラネバナンメリサレド中昔ノ宇津保何ク
レノ物語ドモ又枕冊子或ハかげろふ日記紫式部日記ナドニこゝ
ろみるトノミアマタミエタレバ（中略）後ニ著述ノ詞の通路ニ
ハこゝろみるトノミイヒテゾアナル 石川雅望翁モハヤクヨリ
こゝろみるナリト物ニモシルセリ

義門の『活語雜話』初編（天保九（一八三八）年成立、同十（一八三九）年刊）による書き入れであり、異同はほとんどない。但し「石川雅望翁・・・」以下の部分は『活語雜話』にはない（なお『雅言集覽』には「こころみ」の項が挙げられている）。

○射る

「射る」は『詞八衛』では「阿行之図」の一段の活に挙げられて

いるが、春庭はこの行の認定について、

○此一段の活は此行のい。か也行のい。か定めがたけれど先しばらくこゝに出しおきつるなほ何れのくだりとたしかに定むべきよりどころありげなりよく考べし

と言及している。それが『詞通路』では「也行」に分類されるようになる。

このことに關して次のような書き入れがみられる（上 十四オ）。
信足云弓ヲ射ルヲモ金物ヲ鑄ルニモ肥後國人ハユルト云ト云ヘ
リ 広藤云サラハ也行ナリ此ホカニモ也行ナル可ク思ハル、事
コレカレアリ紀伊國人俗ユウト云也神代紀上三十七ウ以八甕酒
毎口沃入（後略）

そして「一段の活詞」の「いる（射） いる（鑄）」の下に「沃」を加えている。近世のもののは確認できなかったが、『日本国語大辞典』「射る」の項に「へなまり」ユル（津輕ことば、千葉、志摩、和歌山県、紀州）」とあり、『和歌山県方言』（和歌山県女子師範学校・和歌山県立日方高等学校郷土研究室、昭和八年三月）にもこの件の記載があり、現代でも、和歌山などに弓を射ることを「ゆる」という方言が残っているようである。但しこれはイからユへの音変化と見るべきであろうか。

また「信足」が誰を指すかは不明だが（本居全集（吉川弘文館）

首巻所収の『春庭門人録』に「五富利左兵衛 信足」、大平の「教子名簿」に「五富利主馬信足」とあるが、こと同一人物かどうかは定めがたい。門人達の間で方言もふまえて議論があったのであろう。

○自他の事

『詞通路』は主に「詞の自他」について述べられた書であるが、先に触れたように広藤がその校訂に携わった。文政九年頃には既に「詞の自他の事」が広藤の意識にあったかも知れない。

(上 四十五才) サ行の「下二段の活詞」の箇所に「他ニ然サスルハコ、ノ活也」、(下 ニウ) の「水みちて」の左に「四段オノツカラシカル」、「みたする」の左に「他ラシカスル」などの補入が見出されるが、断片的であり、また義門の「山口栞」初稿本にもこれらの語について触れられており、義門の説の影響も考えられ、断定は出来ない。今は紹介にとどめておく。

むすび

以上雑然とはあるが、版本の書き入れから文政九年三月までの広藤の学問の様子を探ってみた。陳阿が書写した広藤の本がどのよ

うなものであったかは不明である。広藤の著作は「言幸舍塊老翁著述書目録」によると膨大な数にのぼったといわれるが、その中には予定のものや書入本も含まれており、最初に述べたように多くは現存しない。しかし、『詞通路』の書入本が存在したといわれ、また逸書であるが「詞八衝踏分」という書名も「言幸舍塊老翁著述書目録」に見え、あるいは「詞八衝」の書入本のようなものが存在したのではないだろうか。

広藤の学説の独自性は文政十二年の「詞玉橋」改稿本以降に顕著であり、文政九年はまだ「詞八衝」の学説の普及に努めている段階であったが、この時期までに広藤が「詞八衝」の学説をどのように継承・修正し、そしてその後の自分の学問へと発展させる過程の一端、また門人への伝授の様子を垣間見ることが出来るのではないかと思う。今後の研究の参考となれば幸いである。

〈注〉

(1) 板垣勇治郎「草稿本『詞玉橋』について」、岡田希雄「京大所蔵の二種の『詞玉橋』に就いて」(いずれも『立命館文学』

三巻一号、昭和十一年一月) などがあり、また尾崎知光「国語学史の基礎的研究」(昭和五十八年十一月、笠間書院) 第七章

の一連の論に詳しい。なお外村源次郎「草稿本『詞玉橋』に就いて」(『国学院雑誌』四十二巻一号、昭和十一年一月)には武田祐吉所蔵の草稿本写本が紹介されている。

- (2) 赤堀又次郎「富樫広藤の伝」(『帝国文学』第二巻十二号、明治二十九年十二月)、三浦雙鯉「鬼島広藤」(『国学院雑誌』六巻九号、八巻八号、明治三十三年十月、明治三十五年八月、に十回連載のうち、六巻九号掲載のものによる)。

- (3) 注2赤堀、三浦論文には文政八、九年に淡路島に渡ったとある(なお三浦論文に「安政」とあるのは「文政」の誤り)。また尾崎知光は注2の文献には一年の誤りがあり、文政九、十年に淡路にいたのではないかとしている(注1同書、四二八、四二九頁)。

- (4) 尾崎知光「新出本・富樫広藤『詞八衢捷徑』について(付復刻)」(『名古屋大学国語国文学』四一号、昭和五十二年十二月、後に注1同書所収)。「詞八衢捷徑」の表紙には「文政十亥林鐘」(文政十年六月)と記されている。

- (5) 「詞八衢捷徑」の活用表は命令形を除く五段のものである。
- (6) 「山口葉の初稿と当時の批評(義門大徳の寛懷)」(『国学院雑誌』十五巻六号、明治四十二年六月)。

- (7) 三木幸信「義門研究資料集成」上巻(昭和四十一年八月、風

間書房)による。

- (8) 富樫広藤の「千百人一首」(安政四年刊)二巻巻末に付載。

- (9) 逸書であるが、注2三浦論文の八巻二号(明治三十五年一月)掲載分に紹介がある。

(かきもと ゆり 関西大学非常勤講師)